
19 世紀フランスのフルート製造と博覧会

——ジャン＝ルイ・テュルーを中心に

井上さつき 愛知県立芸術大学音楽学部教授（音楽学）

1. はじめに

19 世紀、特に 1830 年から 70 年にかけて、フランスの楽器製造業は急速に発展し、楽器に関する多くの特許が申請された。この時期、フランスの優位性は国内外で確立され、フランスは楽器製造のヘゲモニーを握った。

フルートを含む木管楽器製造にとって画期的だったのはドイツのテオバルト・ベーム Theobald Böhm (1794 – 1881) の考案によるキー機構、ベーム・システムの導入であった。1832 年に発表されたベーム・システムは 1847 年までに完成し、モダン・フルートの基礎が形づくられた。フランスではリュッフェとゴドフロワ&ロットが 1830 年代末にフルートにこのシステムを初めて導入し、その後ベーム・システムは木管楽器のほとんどに取り入れられた。

ところが、ベーム式フルートがフランスの音楽家養成の最高機関であるパリ音楽院で採用されたのは 1860 年になってからのことで、それまでは従来型の楽器が使われていた。その間、新式の楽器の採用が検討されなかったわけではない。しかし、パリ音楽院のフルート科のただ一人の教授だったジャン＝ルイ・テュルー Jean-Louis Tulou (1786 – 1865) は徹底的にベーム式フルートに反対した。実は、テュルーは職工長のノノンと組んで自ら「テュルー印」の楽器製造業を営み、1831 年来、その楽器をパリ音楽院の公認楽器として納入していたのである。

テュルーのフルート製作がたどった道は、ベーム・システムを取り入れた製造業者や、それを支持するフルート演奏家たちとの闘争の歴史でもあった。テュルーは名演奏家かつパリ音楽院教授という地位を存分に生かして、引退するまで自分の会社のフルートを音楽院の公認楽器として、ベーム式フルート導入の阻止に動いた。

この小論では、テュルーを中心に、19 世紀のフランスのフルート製造の新旧型闘争の歴史を博覧会という視点から掘り下げてみたい。

2. ジャン＝ルイ・テュルー

パリに生まれたテュルーはパリ音楽院のフルート科でヴンデルリックに師事し、1801年、14歳の若さで一等賞を得て、プロの奏者としての活躍を始めた。フェティスによれば、テュルーのフルートは音程が正確で音色は美しく、その演奏は華やかで精彩に富み、だれよりも表情豊かに、だれよりも優美で繊細だった。

彼の音楽性は万人の認めるところだったが、若い頃は周囲と衝突し、不遇な時代もあった。しかし、1829年1月1日付で念願のパリ音楽院フルート科教授に任命されると、それから引退するまでの31年間、フルート科教授として権勢を振るった。

○テュルーの『フルート教本』

テュルーは1835年に『フルート教本』を出版したが、パリ音楽院では、1845年、このテュルーの教本が、従来のユゴー＝ヴンデルリックの教本に代わって公式に使われるようになった。その後フルートに新しいキーが追加されると、フィンガリングなど補足の情報が追加された改訂版が逐次作られたが、根本が変化したわけではない。テュルーは教本で、音の出し方、指のポジション、アーティキュレーションの仕方、導音の際の指使い、難しいパッセージの際の簡易なフィンガリングなどを中心に述べている。

重要なことは、テュルーの教本が彼自身のデザインによる楽器を使う学生のために書かれていたことである。テュルーはジャック・ノノンと組んでフルート・ビジネスを始め、彼の楽器は1831年からパリ音楽院の公認楽器として納入されるようになった。二人は1828年から手を組んで楽器を作っていたが、パリ音楽院との契約は彼らの公的なパートナーシップを促進した。

テュルーがノノンと一緒に作っていたのは木製の「フリュート・オルディネール」、つまり、普通の標準型フルートで（「オルディネール」を普及型と訳している文献もある）、ゴッドフロワのような新式のシステムではないということを強調していた。テュルーは1834年、内国博覧会に初出展するが、その話の前に、実際に楽器を作っていた職工長ノノンについて触れておこう。

○ジャック・ノノン

近年のルネ・ピエールによる研究で、ようやくノノンがどのような人物だったのか判明した。それによれば、ジャック・ノノン Jacques Nonon (1802-1877) はロレーヌ地方北部、モーゼル川沿いにある都市メス(メッツ)で、木工ろくろ師の一家に三男二女の次男として生まれた。注目されるのは姉マリー・アンヌの息子オーギュスト・シャンビーユ Auguste Chambille が楽器製造業者となり、その息子エルネスト・アンリがベーム式フルート製造の名門ロット社の職工長を務めたあと、引退するロットの後を受けて経営者になったこと。さらにエルネスト・アンリの娘ポーリーヌ・ガブリエル・シャンビーユ (1922-1951) がロット社最後の経営者となったことである。

ジャック・ノノンに話を戻すと、彼は生まれ故郷で木工ろくろ師の修行をした後、パリに上京した。彼がどこで楽器製造の仕事を知ったのかはわからないが、モーゼルではなかった。1828年ノノンはパリでテュルーに会い、彼に銀製の6キーを備えたフルートを見せて判断を仰いでいる。この楽器は現在パリ音楽院の楽器博物館に所蔵されているが、「パリのJ.ノノン」というマークがついている。この時、ノノンはすでに工房を持っていたのかもしれないが、当時の職業別名簿などには記載はない。ノノンの楽器を検分したテュルーは、ドのキーもファのダブル・キーも採用しなかったが、彼の楽器の作りが良いことを認め、1831年から正式にノノンと組んでフルートを製造し始めた。ノノンはテュルーのフルート会社の職工長として22年間にわたって職責を果たした後、1853年に独立して自分の工房をもち、その後は1868年に引退するまでノノン印のフルートを製造した。

○ベリッサンとゴドフロワ

テュルーの『フルート教本』には、1キーから12キーまでのフルートに対応する指使い表がつけられており、当時、さまざまな種類の楽器が使用されていたことがわかる。おそらく、テュルーはこれらの楽器をすべてマスターしていたのだろうとテリエは述べている。また、彼がヴェンデルリックの弟子であったことから考えれば、テュルーがそのキャリアを歩み始めたころは、4キーか5キーのフルート(ド・ナチュラルのキーをもつ)を使っていたのではないか

と推測している。1819年の時点では、テュルーは、ベリッサン Bellissent のフルートを使っていたようである。というのも、この年のパリの商業年鑑のベリッサンの説明に、「王立音楽学校〔パリ音楽院〕およびオペラ座首席フルート奏者テュルー氏のフルート御用達。サントノレ通り 262 番地」とあるからである。

しかし数年後、テュルーはゴドフロワのフルートを使うようになっていた。1826年の年鑑には「ゴドフロワ・エネ、王立音楽アカデミー〔オペラ座〕とテュルー氏唯一の御用達、モンマルトル通り 67 番地」という記載が見られる。ゴドフロワ・エネ〔年上のゴドフロワ〕Godefroy aîné とはクレール・ゴドフロワ Clair Godefroy (1774-1841) を指す。

○テュルーの工房

テュルーの工房がどのような状況だったかについては、後で触れる 1839 年の内国博覧会に出展したときのテュルー自身の記載から、ある程度明らかになる。年商は 40,000 フランから 45,000 フランで、10 人の職工を雇用し、うち 6 人は中で、4 人は外で働いていた。日給は 4 フランから 9 フランだった。使用材料は高級木材、金、銀である。楽器の値段は 50 フランから 600 フランまでの幅があり、フランス国内外で販売されていた。当時の 1 フランはおおよそ現在の邦貨の 1,000 円に換算できる。とすると、年商が 4,000 万円から 4,500 万円、楽器の値段は安いものが 5 万円から高いもので 60 万円というところか。楽器の値段が安すぎるような気がするが……テュルーのフルートのマークはロシニョール、つまり夜鳴きウグイスである。テュルーは 1816 年ソプラノ歌手との《夜鳴きウグイス》というオペラのデュオで名声を得たというエピソードがあることから、夜鳴きウグイスを楽器のマークにしたのだろう。工房はテュルーの家と同じ住所、つまり、マルティール通りの 27 番地の 1 階にあり、同じ建物の 3 階に雇人のノノンが住んでいた。

○内国産業博への参加

テュルーの演奏家としての名声はテュルーの楽器を売るのに大きな宣伝効果があったことは確かだが、それに博覧会での受賞が加われば、鬼に金棒であっ

た。テュルーは 1834 年の内国産業博覧会から 1855 年の第 1 回パリ万国博覧会まで、主な博覧会には毎回楽器を出品し、さまざまな賞を受けた。

テュルーとノノンが組んでいたのは 1853 年までだが、その間、1834 年、1839 年、1844 年、1849 年の各回の内国産業博覧会、そして 1851 年の第 1 回ロンドン万国博覧会に参加している。そこで出品されたのは、5 キーあるいは 6 キーをもつ高品質の楽器であった。

3. 内国産業博覧会とは

では、内国産業博覧会とはどのようなものだったのだろうか。

もともと万国博覧会の前身にあたるフランス内国産業博覧会が初めて開かれたのはフランス革命下の 1798 年のことである。当時総裁政府の内務大臣を務めていたフランソワ・ド・ヌシャトーの発案だった。彼は、フランス共和国は美術の保護者としての名声をすでに勝ち得ているので、今度は実用工芸の育成が急務であるとして、第 1 回フランス内国産業博覧会を開いたのである。

一方、公的な絵画と彫刻の初の展覧会は、それより 130 年あまり前の 1667 年、ルイ 14 世の治世下ですすでに行われていた。「サロン（官展）」である。「サロン」は、ルイ 14 世の中央集権政策の一環として成立したアカデミー・フランセーズの中の絵画と彫刻のアカデミーが主宰する公式の展覧会で、顕彰制度を伴っていた。この時代、アカデミー会員たちは、「工芸」との差別化をはかり、自分たちの地位を「職人」から「芸術家」へと向上させていた。その際に彼らが強調したのが、自分たちの職業がもつ理論的かつ非営利的な側面だった。

フランス革命後、特権的な身分制を否定する革命政府によって、1791 年ギルドが廃止され、93 年にはアカデミーも廃止された。しかし、95 年にそれまでのアカデミーに代わる組織として創設されたフランス学士院（アンスティチュ）は、多くのメンバーがかつてのアカデミーの会員であったところから、旧体制下の理念を受け継いでいる部分が多く、美術学校の運営と官設展覧会「サロン」の開催という権能を 19 世紀に入っても持ち続けた。旧体制の時代には「サロン」に出品できるのはアカデミー会員に限られていたのに対し、革命後「サロン」は万人に開かれたものになった。一方、さまざまな特権が廃止されたことにより、産業が自由に発展する素地が整った。

ド・ヌシャトーが実用工芸を育成するための第一回内国産業博覧会を開いたのは、そんな折りのこと。フランスはいち早く産業革命を成し遂げたイギリスに対抗するために、国内の産業を育成しなければならなかった。実際、安価で良質なランカシャーの織物やウェッジウッドの磁器などにより、フランスの市場は食い荒らされていたのである。産業博覧会の特徴である、商品の「コンクール」を行い、権威ある審査委員会によって褒賞するという制度は、「サロン」で行われる美術作品の審査方法を踏まえたものだった。ド・ヌシャトーは芸術作品の代わりに、実用工芸品を「展示」しようと考えたのである。展示会場は「産業の聖堂」と呼ばれ、その周囲を画家ダヴィッドの設計になる60ものアーチが連なる回廊が取り囲むという構造だった。ただし、実用工芸品の展示だけでは人を集められないと考えた彼は、共和国記念日の式典のアトラクション(騎馬パレード、軍楽隊、気球、イルミネーション、ダンス、花火)と博覧会を結び付けて集客をねらった。

この内国博が成功裡に終わったのを受けて、その後も、パリでは内国産業博覧会は全部で11回、半世紀にわたり規模を拡大しながら開催され続けた。博覧会は当初、不定期開催だったが、テュルーが初出展する1834年からは5年ごとに開かれた。この間に政治体制は、革命期を経て、ナポレオンの第一帝政、王政復古、七月革命後の七月王政、そして二月革命後の第二共和政とめまぐるしく変化した。それにもかかわらず、国の為政者は例外なく産業博覧会を開催しつづけた。政体がいくら変わろうとも、国としてのフランスがめざす基本線はぶれなかったのである。博覧会後に発行される公式審査報告書は情報の宝庫である。

○内国産業博覧会でのフルートの出展

各回の内国産業博覧会に積極的に出展していたのは、当時飛ぶ鳥を落とす勢いで発展を続けていたピアノ製造業であるが、フルートについては、1823年の博覧会で、ゴドフロワ・エネとベリッサンが「全体的によく作られている」という評価を受けて「佳作 Mentions honorables」となっている。一人が数種類の楽器を出展している場合もあるが、ゴドフロワ・エネとベリッサンはフルートだけを出品していた。内国産業博覧会では、金メダル、銀メダル、

銅メダル、佳作の4つの賞が与えられた。この博覧会では、フルートには佳作より上の賞は出されていない。

次の1827年の博覧会では、フルートに特化した出展者のなかでは、ゴドフロワ・エネは「よく整備されたフルート」に対して銅メダルが授与され、一方、ベリッサンは「よく作られたフルート」に対して佳作を得るに留まった。つまり、この時点で、ゴドフロワ・エネがベリッサンを抜かしたのである。

続く1834年の博覧会はテュルーが初参加した博覧会だが、全体の出展者の増加につれて、木管楽器部門の出展も増えている。フルート部門では、ゴドフロワ・エネとテュルーの二人が銅メダルを受賞した。報告書では、ゴドフロワを第1級のものとして位置づけ、テュルーもそれと同等とみなしている。ちなみに、テュルーが出品したのは5キーのフルートで、ゴドフロワの方は「C足部管と6から12キーをもつフルート」だった。ちなみに、フルート部門では二人の銅メダルが最高位だったのに対し、ピアノ、ハープ、弦楽器の製造業者は数多く金メダルや銀メダルを受賞していたことは注目される。

1839年の博覧会では、テュルー、ゴドフロワ・エネ、ビュッフェ・フィス〔息子〕の3人が最高位の銅メダルを得たが、テュルーが「標準型フルート」の部門でトップに挙げられていることが注目される。つまり、3人とも銅メダルではあるが、順位がついていて、その中の1番がテュルー、2番がゴドフロワ・エネ、3番がビュッフェ・フィスだった。

ところが、この審査報告書のフルートの項目で、まさきに述べられているのは、ベームによる改良についてなのである。文章は、最近フルートに加えられているさまざまな改良のなかでもっとも注目されるのはベーム氏によるものだ、という内容から始まっている。ここで問題になっているのは、テオバルト・ベームが1832年に考案した新式フルートのことである。演奏家でもあったベームは1832年来、自らこの楽器をパリやロンドンで演奏して回ったが、楽器製造業者はすぐにベーム式の楽器を作ろうとしなかった。しかし、1836年4月1日から業務提携を始めたゴドフロワとロットはベーム式の楽器の製作に乗り出し、やがて、ビュッフェもベーム式の楽器の製作を始めた。

1832年のベーム式に賛同して使い始めたフランスのフルート奏者はポール・イポリット・カミュ(1796-1869)、ルイ・ドリユス(1812-1896)、そ

してヴィクトール・コシュ（1806-1881）であった。三人ともパリでよく知られた演奏家で、パリ音楽院の卒業生であり、カミュはヴンデルリックの弟子、ドリュスはギユーの弟子、そしてコシュはテュルーの弟子だった。三人の使っていた楽器は少しずつ異なり、また、提携している楽器製造業者も異なっていた。ドリュスはゴドフロワ&ロットと、コシュはビュッフェと手を組んでいた。

1839年の博覧会の審査報告書では、ベーム式の楽器は、楽器製造業者が個々に改良を加えた結果、アンブシュアや指使いが楽器ごとに異なり、そのすべてを同じ演奏者が演奏することができず、比較できなかつたので、賞を授与することはできなかつたとしながらも、「フランスにベーム式フルートを導入するのにもっとも貢献している製造会社は（……）ゴドフロワ・エネとビュッフェ・ジュヌヌである」とはっきり述べている。

4. パリ音楽院でのベーム式フルートクラス増設審議

コシュはテュルーの弟子で、パリ音楽院で長年（無給）アシスタントを務めていた人物である。コシュは、1838年、学士院芸術アカデミーの会員たちの前で、ビュッフェと組んで製作した円錐管ベーム式フルートと従来の標準型フルートとの比較を試みた。ベーム式フルートとコシュによる改良は好評を博し、報告書には、ケルビーニ、オベール、アレヴィなど、芸術アカデミー作曲部門の作曲家たちを始めとする委員たちが署名した。

コシュは翌年ベーム式フルートのための教則本を出版し、さらに、パリ音楽院の教育委員会（コミテダンセニユマン）に新しいベーム式フルートのクラスを増設する提案の働きかけをおこなった。この会議については、ジャンニーニの本などでもかなり語られているので、ここでは概要だけ触れておこう。これは、パリ音楽院に1832年型円錐管ベーム式フルートのクラスを作るかどうかを審議するための会議で、正式には「新式のフルートの長所と短所を判断し、この楽器の教育のために特別クラス（の開設）を要求するかどうかを確かめるため」の会議であった。

会議は1839年12月30日から1840年1月18日までの間に4回開かれた。委員はケルビーニ（パリ音楽院院長・作曲家）、ベルトン（作曲科教授）、ドゥルラン（和声科教授）、ドブラ（ホルン科教授）、ヴォクト（オーボエ科教授）、

ル・ボルヌ（和声科教授）、バンドラーリ（声楽科教授）、アブネック（パリ音楽院管弦楽団指揮者）の9名であった。

今回、文献を読み直して改めて気が付いたことは、この会議がパリ音楽院の教育委員会の第273回から第276回に当たっていたことである。そのため議事録が残っているわけだ。教育委員会の設置は1832年1月21日付の省令で決められ、少なくとも毎週1回、院長の招集で集まることになっていた。そこで審議されるのは、定期試験や卒業試験など、試験に関することが主だったが、審議項目の最後に、教育に資する提案というものがあり、新式フルートクラスの件はそこに該当した。

初回の議事録には、会議の冒頭、王立劇場の特別委員会からケルビーニにあてた手紙が朗読されたと書かれている。内容は、教育委員会を招集して『『ベーム式』と呼ばれるフルートの教育のための特別クラスを（パリ）音楽院に作ることに適切か？』について審議してほしいというものだった。

この件に関する議事録全体の見出しには確かに「コシュ氏の依頼による調査」という文言があるのだが、アシスタントにすぎないコシュの提案で教育委員会が開かれることはありえない。初回の議事録で読まれた手紙から、コシュは「王立劇場の特別委員会」を動かしたことがわかる。当時は七月王政期なので王立劇場という呼び方になるのだが、ここにはパリ・オペラ座やオペラ＝コミック座、テアトル・イタリアンなどの助成劇場が含まれていた。パリの劇場で演奏する代表的なフルート奏者たちが楽器製造業者と協力して、ベーム式に修正を加えながら採用するようになり、それを広めようという気運がたかまっていたのだろう。実際、ベルギーのブリュッセル王立音楽院では、1832年の開学当初からベーム式を採用していた。

審議では、ベーム式フルートのクラスを新設すると、出費の増大が予想される、あるいはほかの管楽器でも同じような要求が起こるのではないかと危惧する意見も聞かれたが、教育委員会はまずテュルーを呼ぶことにした。

2回目（1840年1月7日）の会議でテュルーは当然ながら標準型フルートの方が良いと力説し、円錐管ベーム式フルートの音質は許容できないと述べて、新クラスの設置に大反対した。

ケルビーニは翌週開かれた3回目の会議にベーム式フルートを演奏してい

る演奏家3人（コシュ、ドリユス、カミュ）、円錐管ベーム式から標準型フルートに戻った演奏家2人（コニック、フリック）が呼び出された。標準型に戻った演奏家たちからは、ベーム式は音程が不均等であり、メカニズムも難しいという意見が出た。賛成派では、カミュが欠席し、コシュとドリユスが意見を述べた。彼らは、標準型フルートでは演奏困難なパッセージが、このフルートならば容易に演奏できるというものであった。ただし、コシュとドリユスはそれぞれ1832年型円錐管ベーム式フルートに変更を加えていたため、楽器の形状が異なっていることは問題になった。ドリユスは標準型フルートとベーム式フルートで同じパッセージの吹き比べを求められ、それに応じたが、委員たちはドリユスの演奏を聴いて「旧式のフルートの方が正確で、快い」と感じたこと議事録にあり、当時の音の美意識がうかがわれる。

4回目の会議にはテュルーとコニックとフリックが再度呼ばれた。コシュが前もってケルビーニに標準型フルートでは演奏困難と考えられるパッセージを送ってあったが、3人は標準型フルートで難なく吹きこなした。審議の結果、パリ音楽院における円錐管ベーム式フルートクラスの設置は満場一致で延期された。委員たちは、会議の中で、標準型フルートとベーム式フルートの演奏を聴き比べた上で、標準型を支持した。彼らは円錐管ベーム式フルートの低音を耳障りだと感じ、音程も良くないと感じたようだ。

結局、テュルーの勝利であった。立場を失ったコシュは1841年にパリ音楽院のアシスタントの職を辞した。

5. その後の展開

○1844年の内国産業博覧会

テュルーはこうして、1832年型ベーム式フルートと弟子のコシュをパリ音楽院の教育から締め出すことに成功し、フルート製造業の面では、ノノンと組んで、標準型フルートの製造を続けた。

1844年5月1日から60日間にわたって、第10回内国産業博覧会がシャンゼリゼで開催され、出品者は3960名に及んだ。テュルーは標準型のフルートとオーボエを出品し、銀メダルを受賞した。「よくできており、非常に（音程が）正確」というのが受賞の理由であった。

○ 1847年のベーム式フルート

ベームはその著書で、1832年の円錐管ベーム式フルートには高音域と低音域に問題があったということを書いている。その問題を解決するために、ベームは音響学的な実験に基づいて内径の形と寸法を決定し、フルートの内径を円錐管から円筒管へと変えた。こうして、1847年型円筒管ベーム式フルートが誕生した。このフルートは早速博覧会に出展された。

○ 1849年の内国産業博覧会

パリで開かれた11回目の内国産業博覧会は、1849年6月1日から半年間にわたってシャンゼリゼを会場として開催され、かつてない規模を誇った。この博覧会は当初、国際博にすることが検討されたが、保護貿易主義に固執する商工業者層や地方行政の反対にあってその案はつぶされ、外国勢は参加しない博覧会となった。

今回の楽器製造部門について、報告書では木管楽器に関して「期待はずれで、製作上ほとんど進歩が見られない」と手厳しい評価がなされた。しかし、すべての木管楽器の中で「唯一、ベームフルートは完成の域に達している」と称賛され、一方、標準型フルートは一般に低音域の音程の正確さに欠けるのが欠点だと書かれている。とはいえ、テュルーの名声が地に落ちたのかといえば、そうではない。テュルーが出展した楽器は銀賞を得て、審査報告書では、「テュルー氏はみずから彼のフルートを演奏したわけではないが、その楽器はオーボエ同様に、第一級に値する」と称賛された。

この博覧会では、テュルーのほかに、ゴドフロワ・エネがベーム式フルートと標準型フルートによって、ビュッフェ・ジュヌがベーム式クラリネットによって、それぞれ銀メダルを受賞した。木管楽器では銀メダルが最高位であった。

パリで18世紀末から続いていた内国博覧会はこの会が最後となった。この博覧会の調査にきた、イギリスのアルバート公の側近ヘンリー・コールが博覧会の規模と盛況ぶりに驚き、ロンドンで計画していた内国産業博覧会を国際的な博覧会にすることを思いついた。こうして、1851年、世界初の万国博覧会がロンドンで開かれることになった。

○1851年ロンドン万国博覧会

「水晶宮」建設で知られる1851年のロンドン万博でも楽器製造のコンクールが行われた。

テュルーはベーム式フルートに頑強に抵抗して自らも標準型フルートの改良を重ね、新たに「改良型フルート（フリユート・ペルフェクショネ）」と名付けた楽器を作った。これはキーの配置を新しくした12のキーをもつ楽器で、1851年のロンドン万国博覧会に初出展された。これは「テュルー・システム」と呼ばれ、フランスでは1930年代までベーム式フルートを拒否する奏者たちによって使われ続けた。とはいえ、テュルー自身はキーを増やすことには反対していた。

ロンドン万博では、メダルはカウンスルメダルとプライズメダルの2種があったが、栄誉あるカウンスルメダルに輝いたのは、ベームとピアノ製造のエラール、そしてサクソだった。ベームは1847年型円筒式フルートにおける音響面とメカニズムの科学的な改良が評価され、他の管楽器にも適用できることが称賛された。プライズメダルを受賞したフルート製造業者は、ビュッフェ、ゴドフロワ、ルダル＝ローズ＝カルテだったが、テュルーの改良型フルートは特別賞（マンション・ドヌール）に留まった。すでに時代の趨勢はベーム式に転じていた。

○ノノンの独立

さて、テュルー製の楽器を実際に作っていたのは、職工長のジャック・ノノンだった。ノノンはテュルー一家が住むマルテュール通り家の3階に住み、つつましく暮らしていた。その彼が、1852年2月、家の近くのヴェロン通り26番地の家を競売で買ったのだ。パリ18区、モンマルトルの一角である。自分が住むためではなく、1852年の時点で18人の借家人が住んでいたアパートを、一棟買いしたのである。家の値段は31,550フランで、それに諸費用4,643フラン、工事に7,360フランがかかり、ノノンが支払った総額は44,540フランだった。当時の1フランが現在の日本の千円として勘定してみると、4454万円。ただし、賃貸収入は1852年当時5,295フランに上ったから、悪い買い物ではなかっただろう。ノノンは独身で、22年間テュルーの下で身を粉に

して働き、爪に火をともしようにしてお金をため、テュルーから独立したのである。

ノノンは翌 1853 年初頭、マルテュール通りからロシュシュアール通りへ引っ越し、自分の名前でフルート製造を始めた。新しく移った先もパリ 18 区であった。ノノンは「自分は 22 年間テュルーの職工長を務め、自分だけが最高の完成度に達するために不可欠な穿孔具や工具」を所有していると広告し、それに対してテュルーはノノンを「不正競争」の罪で裁判所に訴えた。裁判所の判断は、テュルーとノノンは雇い主と部下という関係よりは、友人関係であったと認め、ノノンはテュルーのフルートの「元職工長」という肩書きは今後も使うことができるが、「彼だけが」工具を所有していると言ってはいけない。しかし、それらの工具をテュルーに返却する必要はない、というものであった。裁判の費用は両者折半となった。

テュルーは新たにピエール・ゴトロ Pierre Gautrot (1812-1882) と提携し、楽器製造を継続した。ピエール＝ルイ・ゴトロが 1845 年に始めたゴトロ・エネ社は当初、低価格の金管楽器を製造していたが、急速に成長して、1855 年には 300 人の職工を使って、年間 2 万本の金管、木管、さらには弦楽器まで製造するようになっていた。ゴトロはアドルフ・サククスと激しい争いを繰り広げたことでも知られるが、テュルーはこの新興勢力と手を組んだのである。

1855 年以降、テュルー印のフルートはゴトロ社の製品の一部として販売されるようになった。テュルーとゴトロの関係はテュルーが 1865 年に亡くなるまで続き、その後「テュルー」ブランドはゴトロ社に譲渡された。

○ 1855 年のパリ万国博覧会

1855 年 5 月 15 日から 11 月 15 日まで、シャンゼリゼを会場として第 1 回パリ万国博覧会が開かれた。国際博覧会の開催ではイギリスに後れを取っただけに、フランスは万博開催に国の威信をかけて臨んだ。博覧会の楽器コンクールでは有力人物を配した国際審査団が組織され、審査の結果、テュルーは一等メダル、ノノンは二等メダルを獲得した。

しかし、ベームはさらに上の賞を獲得した。最高位グランプリ・ドヌールを得たのである。1847 年型円筒管ベーム式フルートは高く評価され、その音の

正確さと均質性が称賛された。

6. おわりに

1855年パリ万博での審査によって、完全に勝負がついた。テュルー自身はフルートの音色を根本的に変えてしまったベームの楽器を決して承認しなかったが、万博の楽器コンクールの影響力は大きかった。1859年12月31日付けでテュルーがパリ音楽院を退職した後、その後任となったのは、標準型フルートの演奏者ではなく、ベーム式フルートの演奏者であるドリユスであった。

1860年1月1日付けでテュルーの後を受けてパリ音楽院フルート科教授に就任したルイ・ドリユスにより、パリ音楽院の公認楽器は金属製円筒管フルートへと完全に方向転換した。フレンチ・フルートの新しい時代が始まろうとしていた。

*本稿は、『季刊ムラマツ』Vol.138(2018年冬号)～Vol.142(2019年冬号)に4回にわたって連載した「フランス・フルート奏者列伝」のジャン＝ルイ・テュルーについての原稿の一部に加筆したものである。

主要参考文献

Pierre, René. « Jacques Nonon, facteur de flûtes et de hautbois, dans l'ombre du grand Tulou », *Larigot(Bulletin de l'Association des Collectionneurs d'Instruments à Vent)* 58, octobre 2016 : 24-48.

Tellier, Michelle. *Jean Louis Tulou: flûtiste, professeur, facteur, compositeur: (1786-1865)*. Thèse de Musicologie, CNSM (Paris) 1981. Gallica でインターネット公開。

(以下はパリ内国産業博覧会審査報告書。いずれもCNUMでインターネット公開)

Exposition nationale. 1823. Paris, *Rapport sur les produits de l'industrie française, Paris*, 1824.

Exposition nationale. 1827. Paris, *Rapport sur les produits de l'industrie française, Paris*, 1828.

Exposition nationale. 1834. Paris, *Rapport du jury central sur les produits de l'industrie française exposés en 1834*, Paris, 1836.

Exposition nationale. 1839. Paris, *Rapport du jury central*. Paris, 1839.

Exposition nationale. 1844. Paris. *Exposition des produits de l'industrie française en 1844. Rapport du jury central*, Paris, 1844.

Exposition nationale. 1849. Paris. *Rapport du jury central sur les produits de l'agriculture et de l'industrie exposés en 1849*, Paris, 1850.

Exposition universelle. 1851. Londres. *Catalogue officiel de la grande Exposition des produits de l'industrie de toutes les nations*, Londres, 1851.

Exposition universelle. 1855. Paris. *Rapports du jury mixte international*, Paris, 1856.

ジャンニーニ、トゥーラ、堀江英一訳、有田正広監修『フランスの偉大なフルート製作家たち ロットー族とゴドフロー族 1650年～1900年』トニー・ビンガム（配給元：村松楽器販売株式会社）2007年。

井上さつき『音楽を展示する パリ万博 1855-1900』法政大学出版局 2009年。